

2019年度

一般入試A日程
【2/5（火）】

国語総合

（古文選択可・漢文を除く）

[60 分]

〔共通問題〕

〔一〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

オウム真理教事件が起きたとき、私はそれを他人事としては受け取れなかった。生きる意味を求め、真理を追求してヨガの修行に邁進して、そのあげくに自分たちだけのヘイサ世界に閉じこもり、「救済」と称してサリンを撒くに至った幹部信者たちのことを、傍観者のように眺めることはできなかった。

彼らの姿は、ほかならぬ若い時代の私自身の姿であった。その事件は、私のこころの古傷を深く刺し貫き、忘れてしまったかった私の過去を、執拗に掘り起こした。「オウムはAだ」。そう言いきる地点からしか、私はその事件を語る事ができなかった。

多くの評論家たちがオウムについて論評した。しかし、ほとんどの評論には、自分がひよっとしたらオウムに入っていたかもしれないという切実さを感じられなかった。自分のことを安全地帯の傍観者の位置において、遠くからオウムのことをあれこれダンザイしていた。まるで、自分たちはこの事件にいつさい無関係であるかのような、そういう口ぶりが目立った。

自分のことを棚に上げたまま、戦後日本の教育の不備について語ったり、宗教教育の貧しさについて語る彼らの論調に、私は正直言って吐き気すら覚えた。自分のことを棚に上げて、他人や社会のことを「間違っている」と批評する彼らの姿は、ほかならぬオウム自身がやってきたことと同じではないか。敷地内から毒物が見つかったことを、「フリーメーソンの陰謀」とか「自衛隊機からの攻撃」などのせいにしたオウムと、ぜんぜん変わらないではないか。

私がオウム事件から学んだこと。それは、自己や、社会や、世界について考えるときに、いまここで生きている自分のあり方を、けっして棚上げにしないような思想の重要性だ。「自分」というものを、みずからの思想のなかに巻き込む覚悟がなければならぬ。

いま必要なのは、いまここで生きている「私の生と死」との関係のなかで、自己について考え、社会について考え、世界について考えるような思想である。対象と自分とをけっして切り離さず、この自分がその対象に実際にどのようにかかわっているのかを、つねに考え続けるような思考方法。それが、これからの時代の思索の基本にならざるを得ない。それは、ものを考えることが、つねにそれを考えている自分自身の生き方へとフィードバックするような、そういう思考方法である。私はそのようなものの考え方のことを「生命学」と呼んできた。

ものごとを、自分との関係において考えること。それは、「私の場合はどうなのだろうか」という問いを、たえず自分自身に向かって発し続けることである。「オウムとは何か」を考えるときには、「この私もまたオウムなのではないか」という問いを、いつも自分に向かって投げかけ続けなければならない。

自分を棚上げにせずにものごとを考えていくとは、具体的にはどのようなことなのだろうか。

たとえば「差別とは何か」を例に取ってみる。差別について考えるとき、我々は人種差別、女性差別、障害者差別などの具体的な事実を素材にしてその本質を追求したり、あるいは「差別」一般の構造を社会的に分析したりする。しかし、そのような題材をいわば切り取ってきて、^{まないた} 組の上に置いて、それを安全地帯からカイボウする^(ウ)というやり方だけにとどまっていはいけない。それと同時に、この自分自身が、その題材にどのようにかかわってきたのか、かかわっているのかについて、深く反省し、自分自身を捉えなおしていくことが大切なのだ。すなわち、「差別とは何か」を考えるとき、「この私も差別に加担してきたのではないか、そしていままさに差別に加担しているのではないか」と問い返していくことが必須となるのだ。

自分を棚上げにせずにものごとを考えていくとは、その「B」を突き詰めることであると同時に、それを突き詰めようとする「C」をもまた突き詰めることなのだ。その両方の営みが車の両輪となることではじめて、自分を棚上げにしない思索というのは開始されるのだ。そしてそれこそが、オウム以降の思想の基盤にならざるを得ないと私は思っている。

つまり、対象となるべき「B」と、それに立ち向かっている「C」とのあいだを、絶えず行き来して螺旋状^{らせん}に思索の輪を深めることが基本となる。

すなわち、まず、自分が解明したい何かの「問題」を目の前に取り出してきて、それについて考える。そうやって考えを深めていって、あるところまで進んだときに、今度は、視線を百八十度^(エ)テンカンして、その問題を考えているところの「この自分」について考えてみるのだ。その問題が気になってしかたがない、この自分とはいったい何者なのか。この自分は、その問題といままで生活のなかでどのようにかかわってきたのか。そういうことを考えていく。そうやってある程度まで自分のことが分かったとき、今度はふたたび、「問題」それ自体のほうへと思索を移していく。こういう、輪を描くような思考の進め方が基本となるのだ。

だから、自分を棚上げにせずにものごとを考えていくためには、そのものごと^(カ)に立ち向かうこの私の「過去」と「現在」のありのままの姿を、まず自分自身に向かって暴き出さなければならぬ。たとえば、「差別」について考えるときに、私は、自分が過去に受けてきたであろう差別と、自分が他人にしてきたであろう差別のことを、自分の深い記憶のなかから探り出してきて、それに直面しなければならぬ。それと同時に、いま現在、私が受けているかもしれない差別、私が他人にしているかもしれない差別についても、はっきりと浮かび上がらせてこなくてはならない。そうしたうえで、この自分自身がいかなる差別の渦中にいたのか、そしていまいるのかを、明らかにする必要がある。

そこが明らかになれば、ではなぜ私のような差別の渦中にいた(いる)のかということに考えを進めることができる。あるいは、私が捉えられていた(いる)ところの、この差別の構造はどうなっているのかということに考えを進めることができる。あるいは、私がそもそも「差別」ということがらを探求のテーマに選んだのはなぜなのか、ということの深い意味が明らかになるかもしれない。このような道筋を通って差

別について考えることで、私は、自分から切り離された「差別一般」について D から思索するのではなく、この私も実際に巻き込まれているところの「差別」というものについて、この自分自身込みで思索を進めることができるのだ。

ただ、「差別」のような重い問題にかんする自分自身の生身のかかわりを暴き出すのは、とてもしんどいことである。ほんとうならば、そんなものは目の前から一生隠したままにしておいて、なかったことにするのが一番楽だ。楽なことを選びたいのなら、差別なんかについて考えることはない。でも、それについて、あえて考えを進めてみるつもりならば、それがもたらすしんどさを引き受ける覚悟がいる。

しかしながら、孤独な一人の部屋のなかで、自分自身の過去と現在のありのままの姿を見据えていくのは、とても難しいことである。自分の頭のなかだけでその作業をス（オ）イコウするのは、たいへんなことだ。しかし、この私のことを誰かに聞いてもらえるならば、その作業はずいぶんやりやすくなるかもしれない。ちょうど、このころの悩みをもつ人がカウンセラーに向かって自分のことを語りだすときのように、誰かに向かって自分自身を語ることでできれば、ずいぶん事情は違ってくる。

自分自身の過去の人生について、自分がそこで何を体験し、どのような傷をもち、どうしていまこの問題について考えなければならないのかを、誰かに向かって語ること。

だから、この意味では、自分のことを、こころの底から語ることでできる他者がいたほうが、（b） そのような思索はできやすい。自分が制作した作品や論文などを読んでくれる読者としての他者ではなく、自分の深いところにある重いものや澱よどんだものを、全身で受け止めてくれる他者の存在が、思索それ自体のために必要となる。

では、そのような他者がいない場合はどうすればいいのか。身近に親しい大切な人間がいたとしても、その人は、自分の思考のこだわりやこころの傷を語る相手としては適していないかもしれない。そのようなときのひとつの方法は、私の語りを受け止めてくれるかもしれない未知の他者に向かって、自分自身を表現していくことだ。それは、文章を書くことであつたり、人前で話をするのであつたり、芸術表現をしていくことであつたり、ボランティア的な仕事をしていくことであつたりする。そういう行為をするなかで、あるものごとへのどうしようもないこだわりをもっている自分自身の歴史と内面の必然性を、（カ） ケンキョに、そして深く語りだしていくこと。それを受け止めてくれるかもしれない具体的な他者の姿が、いまはまったく見えないうちでも、その可能性の暗闇に向かって語りを継続していくこと。

自分を棚上げにしない思索は、対象となる「ものごと」の追求と、そのものごとに立ち向かっているこの「自分自身」の追求の間を、絶えず行き来することによって開始される。

この「自分自身」の追求という作業は、自分のことを他者に向かって表現するという「自己表現」の形をとる。具体的な他者に向かってなされるのであれ、未知の他者に向かってなされるのであれ、それは自分自身の歴史とこだわりについての自己表現となるのである。それは文学でいえば「私小説」、芸術でいえば「自画像」「セルフ・ポートレート」に対応する。

思えば、近年の若い世代の文学でも、自分が日常で体験したことを淡々と描く、新たな私小説のような作品が現れてきているし、写真の分野では自分自身の姿を写し取るセルフ・ポートレートが流行している。オウム真理教の信者たちも、最初の動機は「私探し」であった。このような、「私」というものへのシユウチャクと、「私」を他者に向かって表現するという形式は、この時代において何か新たな意味を持ち始めているのではないか。

もちろん、自分自身を語るといふ作業は、とても危ないものをはらんでいる。それは、一歩間違えばうつつとうしいナルシズムにオチイるわけだし、自分のことを語って誰かに受け止めてなくさめてもらいたいという、強烈な「甘え」しか生み出さない危険性もある。このことは、こころしておかなければならない。

そのような罫に落ちないためには、自分自身を表現したあとで、もう一度、自分が立ち向かうべきものとや問題にきっちり帰っていくことだ。自分というものをいったん背景に引き、その自分とのかかわりで立ち現れてくる「問題」に、対決するのである。自分自身を表現するにだけにかまけているのではなく、自分からめとられているところの「問題」と正面から対決すること。それなくしては、**E** というものは成立しない。

私が述べてきたことは、これからの時代に必要とされる「知」のあり方に、何かの示唆を与えるのではないかと思う。たとえば、これからの大学で必要な知のあり方こそが、まさにそのようなものではないのだろうか。

いままでの大学、とくに人文社会系の講座で学生たちに要求されたものは、まず専門分野の知識のチクセキを勉強すること、そして与えられた課題についてその模範解答を作成することであった。そこに欠けていたのは、なぜ自分がそのような課題を知的に追求しなければならないのかということに対する、自分自身へ向かっての掘り下げである。

いままでの大学には、おそらく、この自分の内的な事情という個別的なことを **F** し、対象そのものを純粹に **G** することによって、**H** をもってテーマに肉薄できるといふ、近代科学の認識論があったのであろう。世界を主観から切り離し、対象化することによって知識を得ようとする物質科学の方法論が、人間を扱う人文社会系の学問にまで浸透してきたのである。私が大学にいたとき、私は、テキストを読むときには「自分を無にして」できるかぎりテキストに即して読むように注意されたものだ。そのようにして、ものを考える主体であるはずの自分自身の事情というものを、抑圧していくシステムができあがっていた。

しかし、これからの大学は、それではだめだと思ふ。なぜなら、世界を自分から切り離して対象化する物質科学の方法論では、世界の姿がよりよく見えないような時代に我々は突入しようとしているからである。そのことは、実は、大学という世界に適応できなかった（しなかった）ふつうの学生や社会人の人々が一番よく知っている。彼らは、この自分自身の生活や日常とどういうかかわりをもつのか分からないような講義を、しらけたまなざしで見ている。彼らの目から見れば、大学で講義されているものほとんどは、自分自身と現実世界から遊離した **I**

の論理ゲームである。だから、彼らは大学というものに、はやばやと見切りをつけ、単位だけ要領よくとってあとは就職あっせん幹旋機関として利用するか、あるいはサークルや恋愛の場所として利用するのみである。

大学の教師のあいだでは、「ほんとうに最近の学生はおとなしい」とか、「学生のなかで知的な関心をもっているのは何年にひとりくらいしかない」とか愚痴をこぼすのがならわしたが、それは逆にいえば、学生をそのようなものとしてしか見ることができず、彼らのセンザイ(3)的な問題意識や要求に応じるセンスのない教師たちの責任なのである。

(森岡正博『自分と向き合う「知」の方法』による)

(注1) フリーメイソン……十八世紀初頭、イギリスから広まった、国際的な慈善・親睦団体。謎が多く、一般に秘密結社のような受け取られ方をされている。

(注2) ナルシシズム……自己愛

問一 傍線部(ア)～(コ)の漢字と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は

10。

1

(ア) ヘイサ

1

- ① 委員長のホサをする
- ② 収支をカンサする
- ③ サコクの状態にある
- ④ 経歴をサシヨウする
- ⑤ 機械を手でソウサする

(イ) ダンザイ

2

- ① ソクダンを求められる
- ② 集まってダンゴウする
- ③ 激しいダンアツを受ける
- ④ ベツダン変わりはない
- ⑤ 気温のカンダン差が激しい

(ウ) カイボウ

3

- ① クンカイ処分を受ける
- ② 依頼をカイダクする
- ③ この十年をカイコする
- ④ キカイな事件が起こる
- ⑤ 調査結果をカイセキする

(エ) テンカン

4

- ① アメリカドルを円にカンサンする
- ② カンゲキを縫って進む
- ③ 忍耐がカンヨウだ
- ④ 不備をホカンする
- ⑤ ショカンを述べる

(オ) スイコウ

5

- ① 委員長にスイキヨする
- ② 任務をカンスイする
- ③ キツスイの江戸っ子だ
- ④ 産業がスイビする
- ⑤ サイトウ帳を作る

(カ) ケンキヨ

6

- ① 要求をキヨゼツする
- ② キヨジュウ地を調べる
- ③ 卒業式をキヨコウする
- ④ キヨゲンを吐く
- ⑤ 著作権のキヨダクを得る

(キ) シユウチャク

7

- ① シユウイツな作品
- ② シユウタイをさらす
- ③ 壁の穴をホシユウする
- ④ シユウネン深い人
- ⑤ アイシユウを帯びた後姿

(ク) オチイる

8

- ① カンソな住まい
- ② 客をカンタイする
- ③ ケツカンのある商品
- ④ 名画をカンシヨウする
- ⑤ カンサンとした商店街

(ケ) チクセキ

9

- ① シヨクセキを果たす
- ② コセキが変わる
- ③ 仕事のギョウセキが上がる
- ④ ハイセキ運動が起こる
- ⑤ 廃棄物のシュウセキ場

(コ) センザイ

10

- ① 十年に一人のイツザイだ
- ② サイゲンなく話が続く
- ③ 横綱のケンザイぶりを示す
- ④ サイノウを開花させる
- ⑤ 福祉活動にシザイを投じる

問二 空欄 A に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 11。

① 評論家

② 傍観者

③ オウム

④ 私

⑤ 人間

問三 傍線部（a）「ぜんぜん変わらない」のはどのような点か。最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 12。

- ① 状況を十分に見ないで直感的に判断し意見を述べる点
- ② 常に他者を批判し攻撃しないと気が済まない点
- ③ 社会の問題や課題ばかり取り上げ良い点を見ない点
- ④ 現実を誇張したり嘘うそをでっち上げたりしている点
- ⑤ 他人事ひとことでその事に関する当事者意識が見られない点

問四 空欄 B・C に入る最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は Bは 13・Cは 14。

- ① 自分自身
- ② 思想
- ③ 被害者
- ④ 他者
- ⑤ 視点
- ⑥ ものごと

問五 空欄 D に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 15。

- ① 過去
- ② 安全地帯
- ③ 社会学
- ④ 反省
- ⑤ 加担者

問六 傍線部（b）「そのような思索」の内容として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 16。

- ① 自分自身が加害者として関係しているテーマについて、過去の言動を悔い改めようと考えていくこと。
- ② 加害者や被害者が存在するようなテーマに関して、自分はどちら側に属しているかについて考えていくこと。
- ③ 軽々しくは扱えないテーマに関して、それと自分自身のかかわりについてじっくりと考えていくこと。
- ④ 容易には解決できないようなテーマについて、自己内対話を通じてその解決策をじっくりと考えていくこと。
- ⑤ 様々な考え方があがるテーマに関して、自分自身の考え方ははっきりとさせようと考えていくこと。

問七 傍線部（c）「そのような畏」の内容として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 問題に対する自分の関わり方の思索という本来の目的ではなく、自分自身の経験や体験を語ることそのものや、語ったことを他者に受け止めてもらうことが目的になってしまうこと。
- ② 問題に対する自分の関わり全てを語らずに、自分が加害者でないことを強調したり、逆に自分が被害者であることを強調したりして他者になぐさめてもらうこと。
- ③ 問題に立ち帰り対決するという最終的な目的から逃げ、現状の自分を認めるような思索をしたり、他者にそのような自分について理解してもらおうとするようになること。
- ④ 問題に対して自分がどう関わってきたか考えるという目的ではなく、自分自身をいかなる表現で語るかや、他者に受け入れられるためにいかなる表現で語るかに意識が向いてしまうこと。
- ⑤ 問題について考えることを通じた「私さがし」という目的から離れ、他者に自分をアピールすることや、それを通じて他者に認められることへと目的をすり替えてしまうこと。

問八 空欄 に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 「自分」を巻き込む覚悟
- ② 螺旋状の思索
- ③ 自分自身の歴史とこだわりについての自己表現
- ④ 自分を棚上げにしない思索
- ⑤ 生きる意味

問九 空欄 F・G・H に入る語の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 19。

- | | | | |
|---|------|------|-------|
| ① | F 捨象 | G 分析 | H 必然性 |
| ② | F 考慮 | G 抽出 | H 普遍性 |
| ③ | F 捨象 | G 抽出 | H 必然性 |
| ④ | F 考慮 | G 分析 | H 必然性 |
| ⑤ | F 捨象 | G 抽出 | H 普遍性 |

問十 空欄 I に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 20。

- ① 自己完結 ② 自己弁護 ③ 自己責任 ④ 自己理解 ⑤ 自己破壊

問十一 傍線部 (d) 「センスのない教師たち」の内容として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 21。

- ① 最終的な目的である就職のために役立つ講義であれば、積極的に学び表現する気持ちは持っているという思いをくみ取れない教師。
② 大学での講義は自分が生きることにも何の役にも立たないので、要領よく単位を得て卒業したいという思いをくみ取れない教師。
③ 様々な事柄が複雑に絡み合った現代社会において、どうすればより良く生きていけるのか考えたいという思いをくみ取れない教師。
④ 大学での学びが、自分が生きる世界や社会や生活とどのように関わっているのかについて追究したいという思いをくみ取れない教師。
⑤ 近代科学の認識論である対象と自分を切り離す方法の有効性について、講義を通じて示して欲しいという思いをくみ取れない教師。

問十二 本文についての説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① オウムやそれを論評する評論家は世界や社会での事象に対する向き合い方という点では共通しているが、筆者自身も過去においてそのような向き合い方をしていたと自戒している。
- ② 「差別とは何か」という例を通じて筆者は、自分自身がその問題とどのように関わってきたかを考えることが重要であり、自分と対象を切り離して考えることを否定している。
- ③ 「カウンセラー」や「読者としての他者」とは、自分が語ったありのままの姿を受け入れてくれる存在という意味で用いられており、そのような他者に語ることの重要性を筆者は指摘している。
- ④ 「私小説のような作品」や「セルフ・ポートレート」は、自分自身が社会とどのように関わってきたかを見つめ直す契機になるのではないかと筆者は考えている。
- ⑤ これまでの大学では学生に対して専門的な分野に関する知識を学ぶことを要求してきたが、これからの大学ではより学生の生活に根ざした実用的なことを教える必要があると筆者は述べている。

〔選択問題〕〈現代文〉か〈古文〉かの、どちらかを選択して、一方のみを答えなさい。

〔二〕〈現代文〉次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

環境の意味をつかむということ、これを「認知」と呼ぶ。世間一般によくある考えからすれば、認知とは環境の情報を受け取る受動的な行動ということになるが、これとは逆に、認知とは能動的に情報を作り出す行動だとする考え方もあり得る。これら二つの認知観（以下、「受動的な認知観」「能動的な認知観」）は基本デザインが大きく違っている。

一郎が目の前にいるモノをネコだと認知する場合を例にとつて紹介すると、目の前のネコの視覚情報（仮にそのネコが鳴けば聴覚情報、そのネコを触れば触覚情報、そのネコが臭ければ嗅覚情報、一郎がそのネコをなめてみれば味覚情報）を一郎がそのまま受け取って「ネコだ」と判断するのが認知だ、というのが受動的な認知観である。

これに対して能動的な認知観では、まず一郎と環境とのインタラクション（interaction：相互作用）を認める。ここで「一郎と環境とのインタラクション」と呼ぶのは、たとえば「一郎が少し前に動けば、前方のモノはそれまでより大きく見え、おいがよりきつく感じられる。一郎が左に動けば、前方のモノは机の脚に隠れて見えなくなる。一郎が右に動けば、いままで見えなかったモノの左面がよく見える」というような、「一郎が環境に対して働きかけると、環境がそれに応じて情報を一郎に返してくる」という働きかけ合いを指している。この環境とのインタラクションの中で、一郎が心内にネコのイメージを作り出すのが認知だ、というのが能動的な認知観である。

受動的な認知観よりも能動的な認知観が優れている点の一つは、環境と認知者とのインタラクションを認知に決定的な要因として組み込んでいる点である。実際のところ、環境との濃密なインタラクションがなければ、認知者は認知能力を十分に発達させられない。

いま述べてきたように、環境に働きかけ、環境から情報を受け取るという私たちの日々の営みを「環境とのインタラクション」と呼ぶことにすると、探索も体感も、ともにこのインタラクションだということになる。

探索は、「どんな様子だろう。見てやろう」という意気込み（探索意識）で環境に働きかけ、環境から情報を受け取るインタラクションである。つまり、環境への働きかけに重点が置かれている。

これに対して、体感^Aは、環境から受け取る情報が強烈であり、環境からの情報受け取りに重点が置かれるインタラクションである。両者が違っているのはただ、インタラクションのどこに重点が置かれるかという点である。ワクワク型の体験の中核には探索があり、ヒリヒリ型の体験の中核には体感がある。

環境が謎に満ちていて、探索意識が活性化するほど、探索というインタラクションは話し手の中で圧倒的なものになる。

それを中核とするワクワク型の体験は、語られるべき「面白い」ものになる。同じ情報でも、知識として語るのではなく、体験として語ることで、それだけ自然になる。

それと同様に、環境から受け取る情報が強く体感度が高いほど、体感というインタラクティブな話し手の中で圧倒的なものになる。それを中核とするヒリヒリ型の体験は、語るに足る「面白い」体験となり、体験の文法に基づく体験談が自然になる。

この文章で見えてきた「知識」と「体験」については、特に説明をおこなわず、読者の常識的な解釈にまかせてきた。その解釈で理解できないことのないよう、気を配ったつもりだが説明を加えておきたい。

ここで述べてきた知識と体験は、基本的には、言語によって表現される情報（以下「言語情報」）の下位類である。言語情報は共有可能性の程度に応じて、知識と体験に連続的ながら二分される。

典型的な知識とは、誰にでも共有され得る、公共の言語情報である。逆に、典型的な体験は、自己（ふつうは話し手自身）が専有するだけで他者が共有できない、共有可能性の極端に低い個人的な言語情報と言える。

たとえば「地球は赤かった」という文を取り上げてみよう。

現在は青いが、太古の昔、地球は赤かった。

と言う場合、「地球は赤かった」は誰にでも共有され得る情報を表現している。

つまり、誰でも（それなりのデータを集めれば）「たしかに昔、地球は赤かった」などと賛同したり、「いや、地球は昔から青かった」などと反駁したりでき、「地球が赤かったかどうか」を問題にできる。したがって情報の共有可能性は高い。この文章では、このような言語情報を a と呼んできた。

他方、宇宙飛行士が地球に帰還し、記者会見で、

帰還するとき、宇宙から見たら、なぜか地球は赤かった。

と発言する場合は、「地球は赤かった」は知識ではなく、この宇宙飛行士のかなり個人的な体験を表現している。この場合、情報の共有可能性は限定されている。

たしかに、宇宙飛行士本人は、

いや、あれは自分の記憶違いで、やっぱり地球は青かった。

と、自分の発言を撤回できる。また、同行した別の宇宙飛行士（つまり共同体験者）も、

そうだ。あのとき、たしかに、地球はなぜか赤かった。

何を寝ぼけているのだ。あのとき、地球は青かったではないか。

などと、「地球は赤かった」発言を支持したり、この発言に反対したりできる。だが、その時点で宇宙から地球を見ていない者は、「地球は赤かったにちがいない」あるいは「地球が赤かったはずはない」などとは言い合えるが、「地球は赤かった」「地球は赤くなかった」などとは言い合えない。つまり、「地球が赤かったかどうか」を問題にできない。

いまの宇宙飛行士の例には、体験者（宇宙飛行士）と情報を共有可能な他者（同行の宇宙飛行士）が存在している。だが、他者は一人も情報を共有できず、体験者本人が専有するだけという極端な例もある。

たとえば、宇宙ステーションでサーカスがあり、集まった観客に催眠術師が術をかける。「いまから私が三つ数えると、皆さんは窓の外の地球や月が、ふだんと違う色に見えますよ。どういう色になるかは人それぞれ。では、一、二、三」と、術をかけられた者の一人が、後になってそのときの体験を振り返り、

気がつく窓の外の月は緑だった。地球は赤かった。

のように述懐する場合である。

この例では、「地球や月がどういう色に見えるかは、人によって違う」という前提のうえで、外界の事物のあり方（地球や月の本来の色）にしなければならない、純粹に個人的な体験（地球や月の見え方）が述懐されている。そのため、「地球が赤かったかどうか」を問題にすることは、本人には可能だが（「あれは自分の記憶違いで、地球も緑だったのではないか」など）、他者にはできない。

以上で取り上げた三つの例（太古の地球・宇宙飛行士・催眠術）からわかるように、情報の共有可能性は程度問題であって、有る／無いという二項的な把握よりも、高い／低いという連続的把握になじむ。「共有可能性の程度に応じて、知識と体験に連続的ながら二分」と述べたのは、このような理由に基づく。

知識と体験について以上で述べたことは、日常用語の「知識」「体験」からすればさほど意外ではないかもしれない。だが、注意が必要な点もある。

第一点。日常用語の「知識」とちがって、ここで言う「知識」は、情報の b という尺度だけで定義されている概念である。たとえば、

「犯人は男にちがいない」

「犯人は男だろう」

「犯人は男かもしれない」

のような情報は、確信度が低く、日常用語で言う「知識」とするにはあやふやすぎるかもしれないが、この文章ではこれも「犯人は男だ」のような確信度の高い情報と同様、知識としている。この文章の「知識vs.体験」という対立は、情報の確信度を問わない。

第二点。日常用語の「体験」は、「私たちが誕生以来、日々おこなっているもの」を意味する。経験と言ってもそう違わない。この文章で言

う「体験」もこの意味を持つが、それよりも第一義としては、「ことばによって表現される情報の一種」という、ことばに密着した意味を持つ。念のために言っておくと、「私たちが誕生以来、日々おこなっているもの」と「ことばによって表現される情報の一種」は、別々のものである。ひとこともことばを発しない人について「その人が日々おこなっているもの」を論じることができ、^C「その人がことばで表現する情報の一種」を論じることができない。

なぜこういう区別を言い立て、なぜことばの表現のレベルを重視するのかというと、混乱を避けるためである。たとえば、北京旅行から帰ってきた人が、北京における四色ボールペンの存在を、

四色ボールペン、北京でありましたよ。

と言えばこれは体験の表現だが、

四色ボールペン、北京にありますよ。

と言えば知識の表現である。もちろん、この知識の表現は、この人の北京旅行という体験（経験）に基づいているわけであるから、その点では第二文も、体験の表現と言ってしまうことはないだろうが、混乱を避けるため、この文章ではそういう言い方をせず、「ことばで表された情報」のレベルを重視して、第一の文を体験の表現、第二の文を知識の表現とした。

「私たちが日々おこなっているもの」をもつばら「経験」と呼ばば、「ことばで表された情報の一種」（体験）との区別はハッキリするかもしれない。だが、日常のコミュニケーションにおいて体験の表現がしばしば「実演」としか呼びよのないものであつて、「表現」らしくないということ（これはまた別の話であるが）、などを考えていくと、このような呼び分けはそう厳密にはおこなえない。「私たちが日々おこなっているもの」と「ことばで表された情報の一種」は、別物ではあるが、つながっている。

「戦争の経験」は個人にかぎらず団体や国家も持つことができる。だが、「戦争の体験」を持てるのは個人だけである。団体や国家は身体がないので「戦争の体験」は持てない。このように「体験」ということは、「経験」よりもさらに、身体性と強く結びついている。私たちが日々、環境に身を置いて生きていく営みは、「経験」^Cと言ふよりは「体験」と言ふほうが私にはしつくりくる。これは、ことばで表された情報も「経験」と言ふより「体験」と呼びたいということである。

（定延利之『煩惱の文法』による）

（注） 反駁……他より受けた反対意見に対して逆に論じ返すこと。

問一 傍線部A「ヒリヒリ型の体験」の例として、最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 飲んだことのないワインを試す
- ② ポケットの中をさぐる
- ③ インターネットで誰かのブログをみる
- ④ 美味しい肉を食べ比べる
- ⑤ 美しい庭の緑がまぶしい

問二 空欄 に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 探索
- ② 体験
- ③ 知識
- ④ 体感度
- ⑤ インタラクション

問三 傍線部B「他者にはできない」のはなぜか。最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 本人ならば自分の体験なので、「地球も緑だった」などと訂正もできるが、他者はその人の知識については訂正できないから。
- ② 体験した者が専有する情報だから、情報を共有できない他者は論じることができないから。
- ③ 常識的に「地球が青い」と誰でも知っているの、「赤い」という発言を他者は問題にしないから。
- ④ 本人以外の他者は、催眠術にかけられたことを知っているの、「赤く」見えてもおかしくないと思うから。
- ⑤ 地球を見たことがない他者には、地球の色が青いことはあやふやな情報で確信が持てないから。

問四 空欄 b に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 26。

- ① 意外性
- ② 確信度
- ③ 関連性
- ④ 信びよう性
- ⑤ 共有可能性

問五 傍線部C「経験」と言うよりは「体験」と言うほうが私にはしっくりくる」のはなぜか。最も適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 27。

- ① 私たちは日々色々な環境に身をおいて生きているので、環境とのインタラクションと身体性が強く結びついているから。
- ② 私たちは日々おこなっている「経験」よりも「ことばで表された情報」である「体験」に重点を置いているから。
- ③ 「私たちが日々おこなっているもの」と「ことばで表された情報の一種」は別物であるので、この二つのことばの表現は厳密に区別しなければならぬから。
- ④ 日常のコミュニケーションでは、実際の出来事の中で「実演」としか呼びようのないものは「体験」と言った方がいいから。
- ⑤ 日常でのことばの表現は、実際のコミュニケーションの実践の中で行われるので、団体や国家よりも個人的な話題と強く結びついているから。

問六 本文の内容に**合致しないもの**を、次の中から二つ選び、番号で答えなさい。ただし解答順は問わない。解答番号は ・ 。

- ① ふつう体験は、話し手が自己の情報を専有するだけであるから、他者との共有の可能性は低い言語情報である。
- ② 「ことばによって表現される情報の一種」と「私たちが誕生以来、日常おこなっているもの」は区別されるものである。
- ③ 一般には、認知とは環境の情報を受け取る行動のことであるので、認知には情報を作り出すという考え方はない。
- ④ 能動的な認知観は、環境と認知する者とのインタラクションが認知の決定的な要因として組み込まれている点で、受動的な認知観よりも優れている。
- ⑤ ワクワク型の体験の中核には探索があり、環境が謎に満ちていて探索意識が活性化するほど、話し手の中で体感というインタラクションは圧倒的なものになる。
- ⑥ 環境への働きかけに重点が置かれ、環境から情報を受け取るインタラクションを探索といい、環境からの情報受け取りに重点が置かれるインタラクションを体感という。

〔二〕〈古文〉 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

むかし人は、いふべき事あればうちいひて、その余はみだりにものいはず、いふべき事をも、いかにもことば多からで、その義を尽くしたりけり。我が父母にてありし人々もかくぞおはしける。父にておはせし人のその年七十五になり給ひし時に、^{（1）}傷寒をうれへて、事きれ給ひなんとするに、医の来たりて独参湯をなむすむべしといふなり。よのつねに人にいましめ給ひしは、「年わかき人はいかに^Aもありなむ。よはひかたぶさし身の、いのちの限りある事をもしらずで、葉のために息苦しきさまして終はりぬるはわろし。あひかまへて心せよ」とのたまひしかば、この事いかにやあらむといふ人ありしかど、^{（2）}疾喘の急なるが、見まぬらすも心苦しといふほどに、生姜汁にあはせてすすめしに、それよりいき出で給ひて、つひにその病癒え給ひたりけり。後に母にてありし人の、「いかに、この程は人にそむき臥し給ふのみにて、また物のたまふ事もなかりし」と問ひ申されしに、「されば、頭の痛むこと殊に甚だしく、我いまだ人にくるしげなる色見えし事もなかりしに、日頃にかはれる事もありなむには、^Bしかるべからず。又、世の人、熱にをかされて、ことばのあやまち多かるを見るにも、^{（1）}しかじ、いふ事なからむにはと思ひしかば、さてこそありつれ」と答へ給ひき。これらの事にて、^{（2）}世のつねの事ども、思ひはかるべし。かくおはせしかば、^{（3）}あはれ、^C問ひまゐらせばやと思ふ事も、言ひ出でがたくしてうち過ぐる程に、^{（3）}失せ給ひしかば、さてやみぬる事のみぞ多かる。世の常の事共は、さてもやあるべき。親・祖父の御事、^{（3）}詳らかならざりし事こそくやしけれど、今は問ふべき人とてもなし。

（新井白石『折たく柴の記』による）

*傷寒……激しい熱病。チフスの類とされる。 独参湯……気付け用の煎じ薬。 疾喘の急なる……急な病気で呼吸が速く、息苦しくなること。
人にそむき……家族に背中を向けて。

問一 傍線部 A～C の語句の意味として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は

32。

30

A いかにもありなむ

- ① どのように考えればよいだろうか。
- ② いかにもありそうなことだ。
- ③ どのようであっても構わない。
- ④ どのように振る舞うのがふさわしいだろうか。
- ⑤ 一体どうということなのだろうか、納得できない。

30

B しかるべからず

- ① ふさわしくない。
- ② 叱ってはならない。
- ③ そのようなことはあるはずがない。
- ④ 叱りつけるのは望ましくないが、やむを得ない。
- ⑤ そのようなことがあってよいだろうか、いやよくない。

31

C 問ひまゐらせばや

- ① 尋ねなされたならば
- ② お尋ね申し上げたい
- ③ 尋ねなされたので
- ④ お尋ね申し上げたので
- ⑤ お尋ねになってほしい

32

問二 二重傍線部X・Yの語句の文法的意味の説明として適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は 33 ・ 34。

X 「にて」

- ① 格助詞「にて」
- ② 格助詞「に」＋接続助詞「て」
- ③ 断定の助動詞「なり」の連用形＋接続助詞「て」
- ④ 完了の助動詞「ぬ」の連用形＋接続助詞「て」
- ⑤ ナリ活用の形容動詞の連用形の一部＋接続助詞「て」

33

Y 「る」

- ① 受身の助動詞「る」の終止形
- ② 尊敬の助動詞「る」の連体形
- ③ 可能の助動詞「る」の終止形
- ④ 自発の助動詞「る」の連体形
- ⑤ 完了の助動詞「り」の連体形

34

問三 傍線部(1)「しかじ、いふ事なからむには」は、「いふ事なからむにはしかじ」という文を倒置して表現したものである。この文の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 35。

- ① 何も言わないのに越したことはない。
- ② 一言も話してくれないのは困ったことだ。
- ③ 何も言うことがないほど素晴らしい。
- ④ 一言も話さないというわけではない。
- ⑤ 何も言うことがないというのは本当だろうか。

問四 傍線部(2)「世のつねの事ども、思ひはかるべし」とあるが、具体的には何を思いはかれといふのか。最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 36。

- ① 世の中にはいつでも理不尽なことが多いということ。
- ② 筆者の父が常日頃から口数が少なかったということ。
- ③ 人生には苦しいことばかりでなく、嬉しい^{うれ}ことも必ずあるということ。
- ④ 筆者の母は常に自分たちを大切に育ててくれたということ。
- ⑤ 忍耐は武士として平生から持つべき心構えだということ。

問五 傍線部(3)「さてやみぬる事のみぞ多かる」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 37。

- ① そのようにして病気になってしまふ人があまりにも多い。
- ② そのまま終わらせることがかえって実り多い結果をもたらす。
- ③ そのままうまくいかずに終わってしまった事例が最も多い。
- ④ そのようにしてわからないままになってしまったことばかりが多い。
- ⑤ そうしているうちに何をするでもなく時間だけが過ぎていく。